

二人の美味しい時間を存分に満喫する快樂

「二人遊び」の パラドックス

編集者・随文家

坂崎重盛

●さかざき・しげもり 1942年東京都生まれ。著書に『東京煮込み横丁評判記』『TOKYO老舗・古町・お忍び散歩』『秘めごと』礼賛『超隠居術』『蒐集する猿』『名著再会』絵のある』岩波文庫への招待』など多数。

だ。誰が許さないか、ということ、なにより、自分自身が許さない。

意味のない見栄というか、安っぽいダンディズムというか。つまり、無理をする。楽しいからこそ自ら進んで、時間とお金を、そして体力を消費する。

で、結果は、翌日、睡眠不足のボーツとした頭脳と二日酔いのダルイ体をなんとか励まして、その日のノルマを果たさなければならぬハメとなる。実に健康によくない。ま、それは相手にとっても同様ののだが。

会って楽しい仲間や友がいるから、こういうことになる。

会いたくもない人間なら会わなければいいし、仮に会わなければならぬ場合でも用件だけ済ませて、さつさと別れて一人になれる。余計な

人は人と会って刺激を受け 一人過ごすときに成熟する

ときどき心底そう思う。——（なにが体に良くないって、気の合う友達ほど体に良くないものはないなあ）と。

気の合う仲間や友達と会っている時間は楽しい。心もはずみ、気分は高揚する。酒席であれば当然、ピッ

ちは上がり、一軒が二軒さらにはもう一軒で、梯子酒となり夜は更けてゆく。

宴の途中で（まてよ、明日までにやっておかなければならないことがあったな）と思ったとしても、そんなことを理由に中座することなど、まず不可能にきまっている。

遊びには遊びの暗黙のルールがあり、こちらだけの都合で、そこからリタイアすることなど許されないの

時間も使わず、金もかからず、もちろん体も疲れない。

といても、仲間や友と楽しく過ごす時間がまったくないような日々になれわれは耐えられるだろうか。少なくとも私には無理だ。

その上、このごろ思うのだが、私は若いころより、年をとってからのほうが、人と会うのに心理的抵抗がなくなった。人見知りしなくなったというか、新しい人と知り合うことが楽しいのだ。

これは、老化により程良く神経が鈍磨してきたか、微妙にボケがかかりはじめたためか。

人と会っているときの自分の機嫌の良さに自分で気づくことが、このごろよくある。

しかし、とはいうものの、人と会うことはそれ自体、リスクをはらんでいる。ある程度のダメージも予測できる。

人間というものは、何かを発信する存在である。その最たるものが言葉だろう。もちろん、視線や仕草、態度もある。

人と会うということは、それぞれが、それら情報を間断なく、やりとりしているということである。いつぞや防衛といてもいい。それによって刺激を受け、ときに傷つけられたりもする。

たとえば、作家や批評家の交友録などに接すると、彼らの関係の濃密さ、過激さに、読んでいる、こちらが尻込みしたくなるような状況が記されている。

親友でありながら（だからこそ、か）相手の存在を根本から否定するような発言をするかと思えば、まったく理不尽とも思える主張の押しつけ合い、あるいは、お互い、ただひたすら我慢くらべ見栄くらべのようなエネルギの蕩尽。

そんな時間の中で、人は、多かれ少なかれ傷を受け、あるいは疲労する。そして、トボトボと一人の部屋に戻ってくる。

まるで、外を歩き廻り、途中でライバルと出合って攻防のあと、寝ぐらに戻る、かつての野良犬と同じようなものである。

ところで、一人の時間を持つことができないタイプの人間がいる。

常に人と会っていないと不安なのか寂しいのか。ちよつと人と会わず一人していると禁断症状がでてきて、とにかく人と会おうとする。

こういう人はちよつとアブナイ。なぜかという、人と会っていると、きを得た刺激を癒す時間をもたぬまま、また人と会ってしまっからだ。いわば解毒作用のための時間をもたないアル中ならぬ、ヒト中といえる。人と会う。刺激を受ける。一人の時間をもつ。その静かな時間の中で